



Q

河川景観保全のために必要な  
緑化ブロックの植被率について教えてください。



A

植物が護岸部を7割程度被うことで、  
周囲の景観と調和しやすい傾向があります。

■ 背景と目的

護岸ブロックの形状、サイズ、積み方、目地などの組合せによって表現される意匠を景観パターンと呼びます。既往の研究から護岸の表面に穴あきが目立つ景観パターンは周囲の景観と調和しにくいことが明らかになっています。

このような景観パターンは、主に植物の繁茂を目的としているブロック（以下、緑化ブロック）で多く見られます（写真1）。緑化ブロックには、植物を繁茂させるために開口部や緑化スペースを設けます。しかし、植物が十分に繁茂していない状態では、穴が目立ちやすくなり、周囲の景観と調和しにくくなるようです。

そこで、植物が護岸ブロックをどの程度被えば、景観パターンが隠れ、周囲の景観と調和するかを明らかにするため、検討を行いました。

■ 方法

まず、周囲の風景を同じにした上で印象を比較できるように、同一の風景写真に、3要素（植被率、景観パターン、草丈）を変化させた緑化ブロックを当てはめたフォトモンタージュを作成しました（写真2）。次に、作成したフォトモンタージュに対して、周囲の景観と調和しているかどうか、景観パターンが目立つかどうかの設問について、アンケート調査を行いました。

最後に、緑化ブロックが周囲の景観と調和するためには、どの程度の植被率が必要かについて分析を行いました。

■ 結果と考察

アンケート調査を基に分析を行った結果、植被率が70%以上の場合で、護岸周囲の景観と調和しやすい傾向がありました。これは、植被率が高くなることで、穴あき等の景観パターンが目立ちにくくなったためだと考えられます（図1）。また、植物が繁茂することで、護岸から背後地への自然景観の連続性が確保でき、周辺の明度と差がなくなったからだと考えられます。

景観パターンの違いによって評価が変わりました。護岸正面から見た時に穴が目立たない階段タイプでは評価が高く、植被率が60%の場合でも、周囲の景観と調和すると判断されました（図2）。

今後、緑化ブロックを使用する際は、緑化ブロックのタイプを認識し、周囲の景観と調和する植被率の確保を念頭に置く必要があります。

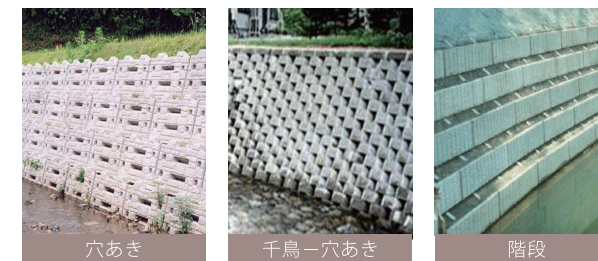


写真1 検討対象とした景観パターン

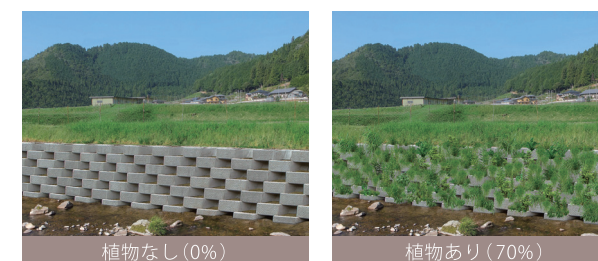


写真2 フォトモンタージュの例

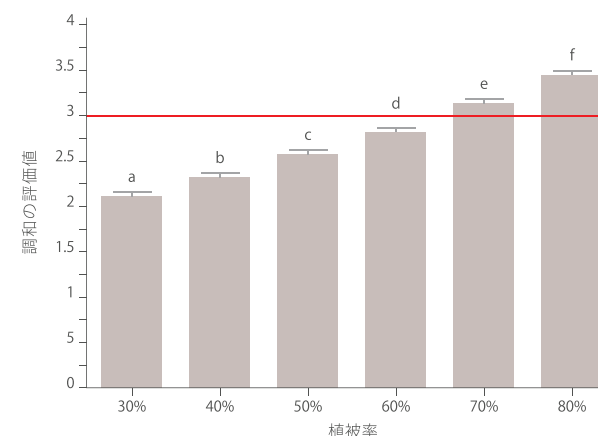


図1 植被率に対する調和の評価値

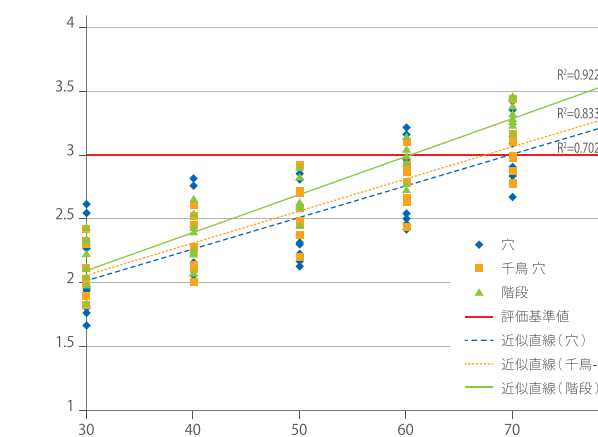


図2 植被率と調和の評価値の関係（景観パターン別）

担当 / 藤森 琢